

『源氏物語』英訳研究

——〈言語的差異による物語の体裁〉

Edward G. Seidensticker 訳を中心に——

元 島 淳 志

今まで『源氏物語』の英語訳が幾度も行われてきた。例えば、ウェイリー訳、タイラー訳、サイデンステッカー訳などがある。しかし、ここで一つ重要な問題がある。それは、言語学的視点を以って考え得る。つまり、日本語（古語）と英語の言語構造が異なっているということだ。日本語には助詞がある。一方で英語には助詞がない。そして日本語には付属語である助詞によって文中における役割（主語や述語など）が決まってくる。英語は助詞がない代わりに動詞を中心とした単語の配置（語順）によって文中での役割が決まる。そのことから助詞のない英語には語順の縛りがある。このように『源氏物語』の原文が異なる言語（英語）に翻訳されたとき、『源氏物語』が『源氏物語』として成り立つのかという問題がある。この問題を検討するために本論では、人物の呼称、敬語、語り手の3点に焦点をあてていきたい。参照する英語訳は、忠実な翻訳（伊井春樹 監修、ハルオ＝シラネ 編集、『講座 源氏物語研究 第十一巻 海外における源氏物語』おうふう、2012年4月）と評価されているサイデンステッカー訳を採用したい。

『源氏物語』本文の引用元は、原文は（石田譲二・鈴木好子 校注 『新潮日本古典文学集成 源氏物語一～八』、新潮社版）、英語訳は（Puette, William J. THE TALE OF GENJI: A READER'S GUIDE. Japan: Tuttle Publishing, 1983.）とする。以後、前者を（【集成一～八】、「巻名」巻、頁数）、後者を（Seidensticker (Page), “Chapter”.）とする。

人物の呼称

まず、人物の呼称について原文と英語訳を分析していく。原文の『源氏物語』では、人物の呼称は「巻」に限らず、場面ごとの細部にわたって同一人物の呼称が変わってくる。光源氏だけでも物語内での呼称は、ときには官職に依拠するなど多岐にわたっている。例えば、光源氏一人でも「源氏の君」、「源氏の中将」、「大将殿」、「主人の院」、「六条の院」、「大殿」などが挙げられるが、ここに挙げたもの以外にも呼称が多くある。なぜこのように人物の呼称が一定しないのか。また、原文には主語も省略されていること

(76)

が多い。この問題は、語り手にも関わってくる。なぜなら、『源氏物語』は語り手が物語をするという体裁を設定しているからである。つまり語り手がまず存在し、そしてその語り手は一人ではなく、複数いると考える。その語り手の視点によって人物の呼称も変わってくる。さて、サイデンステッカー訳の例をいくつか引用する。

…源氏になしたてまつるべくおぼしおきてたり。(【集成一】、「桐壺」巻、32頁)

... he concluded that the boy should become a commoner with the name Minamoto or Genji. (Seidensticker 15, “The Paulownia Court”.)

瘧病にわづらひたまひて、…(【集成一】、「若紫」巻、183頁)

Genji was suffering from repeated attacks of malaria. (Seidensticker 84, “Lavender”.)

…大將の君、さすがに今はおかけ離れたまひなむも、くちをしくおぼされて、…(【集成二】、「賢木」巻、127頁)

Genji was sorry when he heard of her decision. (Seidensticker 185, “The Sacred Tree”.)

…なほその形見と見たまひて、らうたきものにおぼしたれば、…(【集成三】、「玉鬘」巻、281頁)

... Genji had not forgotten the drew upon the evening faces he had seen so briefly. (Seidensticker 387, “The Jeweled Chaplet”.)

…なほいとよく思ひ出でらるれど、かれは、いとかやうに際離れたるきよりはなかりしものを、…(【集成五】、「横笛」巻、323頁)

Genji was strongly reminded of Kashiwagi, but not even Kashiwagi had had such remarkable good looks. (Seidensticker 659, “The Flute”.)

光かくれたまひしのち、かの御影に立ちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり。(【集成六】、「匂兵部卿」巻、161頁)

The shining Genji was dead, and there was no one quite like him. (Seidensticker 735, “His Perfumed Highness”.)

光源氏が“Genji”という呼称で固定されるのは、「桐壺」巻で臣下に下った際の場面である。次に「若紫」巻の冒頭部分である。「瘧病」：“Malaria”に苦しんでいるところから始まるが、原文では呼称どころか主語が省略されている。この現象は「玉鬘」巻と「横笛」巻でも号要である。「賢木」巻と「匂兵部卿」巻の場合は、光源氏であることは、

認識できるが、直接呼称は避けている。原文を分析していくと、①主語が省略されている、②人物の直接の呼称を避けている、という二点に絞られている。しかし、英語訳は主語が必ず配置され、呼称も“Genji”で固定されている。まず、中島平三氏の言葉を借りると「英語では、(中略)どの文でも、主語が必須であり、文の最初に現れ、その直後に動詞が生じる。」(中島平三 『ファンダメンタル英語学演習』、ひつじ書房、2011年2月)ということである。つまり、主語が省略されている原文を英訳とした場合に主語を明記せざるをえない。さて、呼称の固定に関しては「光源氏」、「紫の上」、「夕霧」や「柏木」のような愛称があれば良いが、例えば頭の中将は呼称を固定すると、別の問題が生じる。「頭の中将」は、官職の名前である。つまり、光源氏は、官職と別の愛称がある。しかし、頭の中将はない。ちなみに柏木は、父親と同じ「頭の中将」という官職に就いている。しかし柏木の英語訳は、“Kashiwagi”なので呼称は重複しない。いずれにせよ、頭の中将の就いた官職を巻ごとに追って、英語訳の呼称が固定されていることを確認していきたい。

宮の御腹は、蔵人の少将にて、いと若うをかしきを、…(【集成一】、「桐壺」巻、39頁)

One of the sons, a very handsome lad by his principal wife, was already a guards lieutenant. (Seidensticker 18, “The Paulownia Court”.)

宮腹の中将は、なかに親しく馴れきこえたまひて、…(【集成一】、「帚木」巻、46頁)
Genji was on particularly good terms with Tô no Chûjô. (Seidensticker 21, “The Broom Tree”.)

権中納言、大納言になりて、右大將かけたまへるを、…(【集成三】、「薄雲」巻、177頁)

Tô no Chûjô was agenenal and councilor. (Seidensticker 343, 344, “A Rack of Cloud”.)

大臣、太政大臣にあがりたまひて、大將、内大臣になりたまひぬ。(【集成三】、「少女」巻、230頁)

There were promotions, Genji to chancellor and Tô no Chûjô to Minister of the Center. (Seidensticker 365, “The Maiden”.)

大臣、かしこき行ひ人、葛城山より請じ出でたる、…(【集成五】、「柏木」巻、270頁)
Tô no Chûjô had sent to Mount Katsuragi for an ascetric famous as a worker of cures, …(Seidensticker 637, “The Oak Tree”.)

「桐壺」巻では、まだ「頭の中將」に昇進していない。しかし、「帚木」巻ではすでに「頭の中將」に昇進しているため、“Tô no Chûjô”になる。しかしそれ以降は、昇進しても固定されているのがわかる。つまり、頭の中將の呼称は官職ではなく、光源氏のように愛称として扱いを受けている。この人物の呼称に関して、当事者であるサイデンステッカー氏は、伊井春樹氏との対談で登場人物には決まった名前があるべきで、呼称を固定していなくては、読者が迷ってしまうとしている。また、呼称を固定せずに原文の呼称に委ねたロイヤル・タイラー氏の翻訳を例に挙げ、やはり呼称を固定しなくては、読者が混乱してしまうと強調している（伊井春樹 『世界文学としての源氏物語【サイデンステッカー氏に訊く】』、笠間書房、2005年10月、118頁）。つまり、英語読者の内容理解のことを考慮して、呼称を固定したと考えられる。この呼称の固定が語り手で取り上げる問題に関わってくる。

敬語

現代の私たちが生活するうえで、敬語の使用は欠かせない。『源氏物語』を描くうえでも敬語は欠かせない。『源氏物語』の敬語の必要性に関して、三谷邦明氏は以下のように見解している。

天皇・貴族・地下・良民・賤民などといった、流動は許容するものの厳然とした階層・階級が刻みこまれている律令を形式基盤にしている王朝国家の都市にとって、敬語は社会そのものだったのである。（中略）天皇やその血を引く源氏たちを物語世界に呼び込む。その「天皇」に対して、〈敬語〉を使用しないですます方法などは、王朝国家には存在しないのである。（三谷邦明 『物語文学の言説』、有精堂出版、1992年10月、298頁）

敬語の使用は、物語文学という話体を使用する文学にとっては必然であった。（中略）源氏物語は、時代と社会の状況そのものを言説として引き受け、そのあり方を逆説的に物語の方法として生成したのである。（三谷邦明 『源氏物語の言説』、翰林書房、2002年5月、18頁）

三谷邦明氏が述べたことは、つまり『源氏物語』が成立したとされる前後の時代の社会、特に宮廷社会では敬語の使用が当たり前だった。そのため、宮廷世界の舞台を物語にする際には、やはり敬語の使用は避けられなかった。現代まで存在する日本語の敬語だが、一方で英語には敬語がない。実際に丁寧表現は存在するが、階級、立場、相手との関係によって敬語の度合を調整し、細かく使い分けない。つまり英語には、体系的な敬語がない。そして、どんな相手と話しても英語の場合の二人称は“You”それっきりで、三人称であれば“He/She/It”などである。このように敬語に関して日本語と英語に違いがある。では、敬語が欠かせない『源氏物語』を翻訳した英語訳を確認していきたい。

…人間に参りたまひて、上のおぼつかながりきこえさせたまふを、まづ見たてま

つりて奏しはべらむ」と聞こえたまへど、「むつかしげなるほどなれば」とて、見せたてまつりたまはぬも、ことわりなり。（【集成二】、「紅葉賀」巻、24,25頁）

Genji, filled with his own secret paternal solicitude, visited Fujitsubo at a time when he judged she would not have other visitors.

“Father is extremely anxious to see the child. Perhaps I might have a look at him first and present a report.”

She refused his request, as of course she had every right to do. “He s still very shiveled and ugly.” (Seidensticker 139, “An Autumn Excursion”).

この場面は、「紅葉賀」巻で藤壺が光源氏との密通によって生まれた後の冷泉帝を、桐壺帝が「早く生まれた赤ん坊の顔が見たい」と言っていたのを光源氏が藤壺に伝えている場面である。「…人間に参りたまひて」の主語は光源氏である。「参りたまひて」なので語り手の視点から光源氏への尊敬と光源氏から藤壺への尊敬となっている。しかし、英訳で該当箇所を引っ張ってみると、“Geniji ... visited Fujitsubo”となっている。もちろん、先程述べた通りで敬語は脱落している。さらに、読み進めると、光源氏の発話の中で「上のおぼつかながりきこえさせたまふを、まづ見たてまつりて奏しはべらむ」とあるが、まず「上」は桐壺帝である。光源氏の発話なので視点は光源氏で「…させたまふ」といわれる「最高敬語」であるので光源氏から父の桐壺帝への尊敬である。その後の「…見たてまつりて奏しはべらむ」は、光源氏の「(赤ん坊を) 見てその様子を伝える」という行為が桐壺帝に対する行為なので謙譲が使われている。一方で英訳では、“Father is extremely anxious to see the child. Perhaps I might have a look at him first and present a report.”となっている。先程確認した敬語表現が全てフラットになっているということがわかる。ちなみに括弧閉じのあとの「聞こえたまへど」は英訳で脱落してしまっているが、語り手視点の光源氏への尊敬である。そして、藤壺は「見せたてまつりたまはぬ」と断っている。これは言うまでもないが、語り手視点の藤壺への尊敬である。英訳は当然“She refused”とあるように敬語は抜けている。

これかれと見るもいとうたてあれば、なほ言多かりつるを見つつ臥したまへれば、侍従、右近、見合わせて、「なほ移りにけり」など、言はぬやうにて言ふ。「ことわりぞかし。殿の御容貌を、たぐひおはしまさじと見しかど、この御ありさまはいみじかりけり。うち乱れたまへる愛敬よ。まろならば、かばかりの御思ひを見る見る、えかくてあらじ。後の宮にも参り、常に見たてまつりてむ」と言ふ。右近、「うしろめたの御心のほどや。殿の御ありさまにまさりたまふ人は、たれかあらむ。容貌などは知らず、御心ばへけはひなどよ。なほこの御ことは、いと見苦しきわざかな。いかがならせたまはむとすらむ」と、二人してかたらふ。心ひとつに思ひしよりは、そらごとまたより出で来にけり。（【集成八】、「浮舟」巻、61頁）

Ranged side by side, the two letters seemed to reproach her. She went off and lay

down wiith Niou's, the longer of the two. Ukon and Jijû exchanged glances: so the game was over, and Niou had won.

“Perfectly natural,” said Jijû. “I really thought I had never seen a finer man than the general, but the prince is so handsome, especially when he's just being himself. If he ever paid that much attention to me, I can tell you, I'd be making my plan right now. I'd be looking for a place with Her Majesty, and then I could see him every day of the week”.

“I can see that you bear watching. But I don't agree. The general is the finest of them all. I don't care about looks. Manners and disposition, those are the things that count. But she has worked herself into a fine predicament, on that I think we can agree. Whatever will become of her?”

Life was easier for Ukon, however. It was easier to tall lies and invent excuse now that there were two of them. (Seidensticker 995, “A Boat upon the Water”.)

この場面は「浮舟」巻で浮舟が匂宮と薫の両者から来た手紙を、まず匂宮からの手紙を見たときの様子を傍に控えて見ていた右近と侍従の会話である。まず、「…臥したまへれば」は匂宮の手紙を横になりながら読んでいる浮舟の様子なので、語り手視点の浮舟への尊敬である。それに対応する翻訳部分が“She went off and lay down …”となっているのでここも敬語は脱落している。一方で右近や侍従のような女房階級の場合はどうか。まず、「侍従、右近、見合わせて（中略）言はぬやうにて言ふ。」となっているように語り手視点からの彼女らへの敬語はない。英語訳の該当部分を見ても同様に敬語は存在しない。この二人のやりとりを総じて見ても、原文では多くの敬語が入り乱れている。一方で、英語訳は敬語を脱落させ、文章がフラットになっている。つまり、語り手や登場人物同士の間で暗黙に共有されていた身分差がなくなっている。英語に敬語がない所以である。

人物の呼称と敬語の問題は、日本語と英語の言語的差異から生じた、原文と翻訳の間にある避けられない現象である。この言語的差異から生じた問題や変化が次の語り手の問題に深く関わってくる。

語り手

まず、語り手が行う「語り」という言説は、『源氏物語』の文章が主に、地の文、会話文、内話文、草子地（三谷邦明 『源氏物語の言説』、翰林書房、2002年5月、16頁）の四種に分類できる。この四分類の言説に加え、前節で上げた人物の呼称と敬語の存在が『源氏物語』を語り手が物語をしている体裁を捉えることができる。しかし、語り手は一人ではない。なぜなら、巻ごとに時間軸が重なる巻がいくつかある、それらは別の語り手が語っている。つまり、巻ごとに語り手が決まっているため、同時間の異空間は

語ることができない。つまり複数の語り手の存在を裏付ける。この複数の語り手の存在について三谷邦明氏が「語り」について、三田村雅子氏は自身の研究で以下のように述べている。

特定の女房のように、一人の人物として一貫しているわけではなく、各巻・場面・段落において、主人公や中心人物や脇役たちの傍らで、彼らの周辺で継起した出来事を、体験・見聞した第一次の語り手としての人物が個的（あるいは）集団的に異なり、さらに、次元の異なる別の語り手が複数いるところに、源氏物語の文学的特性があるのである。（三谷邦明 「附載論文 源氏物語と二声性—作家・作者・語り手・登場人物あるいは言説区分と浮舟巻の紋中紋お技法—」、『源氏物語の方法〈もののまぎれ〉の極北』、翰林書房、2007年4月、378頁）

作品内に「聞き手」を仮構し、「語り手」が語るという物語（口承文芸）の特質を『源氏物語』が〈戦略〉、〈方法〉として作品の中に生かそうとした。そして、その特徴が顕著なのが「草子地」や「地の文」であり、近代小説のような無機能的・客観的視点とは違う（三田村雅子 「Ⅱ 欲望と媒介をめぐる 八 語りとテキスト—〈例〉からの遁走—」、『源氏物語 感覚の論理』、有精堂出版、1996年3月、358頁）。

地の文の敬語の使用から見て、実際見聞した同時代の語り手が語るという体裁が『源氏物語』に内包されている。そして、この語り手は一人として一貫した「語り」ではない。神田龍身氏も「語り手は登場人物たちと生きる世界を同じくする等身大の語り手であるため、時間的にも空間的にも制約されることになり、「竹河」巻冒頭部にもあったように、対象世界の質に応じて何人も必要ということになる」（神田龍身 『偽装の言説—平安朝のエクリチュール』、森話社、1999年7月、102頁）と言及している。語り手を実体化させた要点となる草子地には、「…書かず」という省略がみられる。この草子地に対してさらに神田龍身氏は、「…書かず」という草子地により「物語であるにもかかわらず、自らが書くことにより成立したテキストであることを逆説的に認めてしまっている」（前掲に同じ、86頁）としている。つまり、草子地にある「…書かず」という書き手は、生身の現実世界を生きた作者ではない。そのため、語られた内容を筆記編纂者が書き記したことになる。なぜ、物語の作者は自らを隠蔽（無署名と）し、語り手と筆記編纂者という設定をしたのか。陣野英則氏によると、物語文学が無署名であることと「語り」を装った言説は関係している。さらに語り手によって語られる言葉は、音声であるために残らない、それ故に署名することが不可能である。物語文学とは、そのような語り手の言葉を装っていることを前提とした場合、物語作品は無署名であるとしている（陣野英則 『源氏物語の話し声と表現世界』、勉誠出版、2004年11月、278頁）。いずれにせよ、『源氏物語』の語り手の問題は存在し、議論されてきた。この『源氏物語』が英語に翻訳された場合に語り手の設定はどうなるのか。語り手を現前させる地の文や草子地、「…書かず」の表現を踏まえて検討していきたい。

光君といふ名は、高麗人のめできこえて、つけたてまつりけるとぞ、言ひ伝えたるとなむ。(【集成一】、「桐壺」巻、41頁) 草子地

The sobriquet “the shining Genji”, one hears, was bestowed upon him by the Korean. Seidensticker 19, “The Paulownia Court”).

まず、「桐壺」巻末部に記載されている草子地である。「言ひ伝えたるとなむ」が“one hears”と相当する。つまり「言ひ伝えられたことを聞いた」という意味か。“one”とあることから「誰かが聞いた」という意識である。The sobriquet “the shining Genji”, one hears, の下線部分は英語表現のうちの同格表現の一つである。「ある人が聞いた光君というあだ名」という解釈ができる。実際、この引用で現れている草子地からは、原文と英語訳の間に何も相違点がない。ちなみに英語訳の地の文は、今までの引用から、過去形（過去時制）で描かれていることを補足しておく。さて次の草子地の引用は、語り手を論じる上で重要な草子地である。なぜならば、この「帚木三帖」の語り手は複数の語り手であることを色濃く表している草子地であるからである。三谷邦明氏の研究（三谷邦明 「附載論文 源氏物語と二声性—作家・作者・語り手・登場人物あるいは言説区分と浮舟巻の紋中紋お技法—」、『源氏物語の方法 〈もののまぎれ〉の極北』、翰林書房、2007年4月、381頁）において、三谷邦明氏が「帚木」巻冒頭部分の草子地と「夕顔」巻末の草子地に介在する語り手に番号を付している。これにならって見ると、

光源氏名のみこととしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすきごとどもを、末の世にも聞き伝へて、軽びたる名をや流さむお、忍びたまひけるかくろへごとををさへ、①語り伝へけむ人の②もの言ひさがなさよ。さるは、いといたく世を憚り、まめだちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、③交野の少将には笑はれたまひけむかし。(【集成一】、「帚木」巻、45頁)

“The shining Genji”: it was almost too grand a name. Yet he did not escape criticism for numerous little adventures. It seemed indeed that his indiscretions might give him a name for frivolity, and he did what he could to hide them. But his most secret affairs (such is the malicious work of the gossips) ①became common talk. If, on the other hand, he were to go through life concerned only for his name and avoid all these interesting and amusing little affairs, ③then he would be laughed to shame by the likes of the lieutenant of Katano. (Seidensticker 20, “The Broom Tree”).

かやうのくたくだしきことは、あながちに隠ろへ忍びたまひしもいとほしくて、④みな漏らしとどめたるを、など帝の御子ならむからに、見む人さへかたほならず、ものほめがちなると、⑤作りごとめきてとりなす人ものしたまひければなむ（⑥かく書きはべりぬ）。⑦あまりもの言ひさがなき罪、さりどころなく。(【集成一】、「夕

顔」巻、179頁)

④ I had hoped, out of defence to him, to conceal these difficult matters; ⑤ but I have been accused of romancing, of pretending that because he was the son of an emperor he had no faults. Now, perhaps, ⑦ I shall be accused of having revealed too much. (Seidensticker 83, “Evening Faces”.)

三谷邦明氏は、この両巻の草子地に言及されている語り手は五人である、としている（前掲に同じ、381頁）。それによると、一人目は、「光源氏が隠密化していた色好み行為を、書き漏らして第一次稿を書いた人物。④」、二人目は、「語り伝えた人物。①④」、三人目は、「第一次稿を真実を伝えていないと非難した人物。②⑤」、四人目は「第二次稿を書いた人物。②⑥」五人目は、「出来上がった第二次稿を露骨だと批判している人物。②③⑦」と指摘しているが、解釈によって数字番号が重なってしまうと述べている（前掲に同じ、381頁）。三谷邦明氏の言う「第一次稿」や「第二次稿」、また語り手の具体的な人数や特定に関しては、本稿では割愛する。この草子地には語り手が複数存在しているということだけを確認したい。さて、そのような複雑な草子地が英語訳では、興味深い現象が起きている。原文に付した番号と英語訳の番号は必ずしも一致するものではなく、脱落した部分もある。しかし、明らかなことは複数の語り手が英訳では、一人の語り手となっている。これは、複数の語り手を一人の語り手に統合し、一貫した、安定した「語り」の草子地となっているように感覚がある。「帯木」巻にいたっては完全に三人称となっている。何もサイデンステッカー氏の翻訳が劣っているということではなく、あくまで原文の複数の語り手が英語訳によって一人の語り手に変換されたということを確認したい。引き続き「帯木三帖」に複数の語り手がいることを示唆している草子地を分析する。

これは、源氏の御族にも離れたまへりし、後の大殿わたりにありけるわの御達の、おちとまり残れるが、問わず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末々に、ひがことどものまじりて聞こゆるは、われよりも年の数積り、ほけたりける人のひがことにや」などあやしがりける。いづれかはまことならむ。（【集成六】、「竹河」巻、199頁）

The story I am about to tell wanders rather far from Genji and his family. I had it unsolicited from certain obscure women who lived out their years in Higekuro's house. It may not seem entirely in keeping with the story of Murasaki, but the women themselves say that there are numerous inaccuracies in the accounts we have had of Genji's descendants, and put the blame on women so old that they have become forgetful. I would not presume to say who is right. (Seidensticker 751, “Bamboo River”.)

この前置きのような草子地は、髭黒の大將と玉鬢のその後の物語をするための前置きで

ある。今まで光源氏、紫の上方の女房たち（紫のゆかり）が語ってきた物語とは違うが、髭黒と玉鬘のその後のこと（髭黒方の女房たちが見聞いたこと）を語るということである。さらに髭黒方の女房たちである「わる御達」が「紫のゆかり」の語り手たちを「最後の方はぼけてしまったせいなのか、真実ではないようなことまで混じていたのではないか」と批判している。そして、この巻の語り手は「どちらが真実なのかよくわからない」と述べている。英語訳は、この草子地の全体を補足説明するようにわかりやすい。さらに下線を付したが、語り手が表出していることを示唆する一人称“I”を確認することができる。つまり語り手は一人であることがわかる。引き続き用例を見ていく。

御心のうちなりけむこと、いかで漏りにけむ。夜いたうふけてなむ、事果てける。
 (【集成二】、「花宴」巻、51頁)

She recited it silently to herself. How then did it go the rounds and presently reach me? (Seidensticker 151, “The Festival of the Cherry Blossoms”).

この草子地は三谷邦明氏の言葉を借りると「訝しがり草子地」と呼ばれるもので、「心の内に思っていたことがどうして（私に）漏れてしまったのだろうか」という語り手の「訝しがり」である。また、前後の文脈からも語り手ではない作中の人物が思考したものではないとわかる。英語訳では、“How then did it go the rounds and presently reach me?”:「どのようにして“it（そのこと）”が広まり、今、私のもとに伝わったのだろうか。」となっている。「いかで漏りにけむ。」の直訳となっているのだが、“me”という一人称目的格が表出している。地の文あるいは草子地の“me”は語り手を表す。この事実は、先に言及した「帚木三帖」の草子地でも明らかである。次の引用は語り手が本当に物語を語っていたような、現実的な語り手が登場する草子地である。

かの大貳の北の方上りて驚き思へるさま、侍従がうれしきものの、いましばし待ちきこえざりける心浅さを恥づかしう思へるほどなどを、今すこし間はず語りもせまほしけれど、いと頭いたう、うるさく、もの憂ければなむ。今またもついであらむをりに、思ひ出でてなむ聞こゆべきとぞ。 (【集成三】、「蓬生」巻、82頁)

Though no one has asked me to do so, I should like to describe the surprise of the assistant viceroy's wife at this turn of events, and Jijū's pleasure and guilt. But it would be a bother and my head is aching; and perhaps—these things do happen, they say—something will someday remind me to continue the story.
 (Seidensticker 302, “The Wormwood Patch”).

引用全体が語り手の草子地となっている。解釈は、「他にも語りたい面白い話があるのだが、面倒で気が進まない上に頭も痛いので、別の機会に思い出しながらお話ししましょう。」という極めて自由な草子地である。語り手の設定がある以上は、語り手も人であると考えれば、このような草子地は自然である。長い物語を一人で語っていては頭痛がしてくるだろう。一方で英語訳のそれも原文を踏襲した文章になっている。「誰も

求めてはいないけれども、私は大武の北の方が都に上ってきた驚きの話や、侍従の喜びと同時に罪悪を感じた話をしたいが、面倒であり、頭痛もするので、またその機会があるだろうと言うので、その時に思い出しながら話したいと思う。」とある。英語訳に現われている“they say”についてはっきりと示すことができないが、この“they”をここまで物語をしてくれたこの語り手の聞き手たちのことであろうか。いずれにせよ、ここで明確なことは、語り手が一人称で表現されている点に注目したい。これまで原文の語り手は複数いるために複雑化している草子地もあったが、英語に翻訳されると忽ち語り手たちは一人の語り手となり、安定する。しかし草子地に一人称が表出するかどうかは、原文の草子地によるが、複数の語り手にはならないようである。次に引用した草子地は、人物批評の草子地である。これは、有名な「若菜上」巻での蹴鞠の最中で柏木が女三の宮を垣間見た場面である。

猫を招き寄せてかき抱きたれば、いとかうばしくて、らうたげにうち鳴くも、なつかしく思ひよそへらるるぞ、すきずきしや。(【集成五】、「若菜上」巻、129頁)

Kashiwagi called the cat and took it up in his arms. It was delicately perfumed. Mewing prettily, it brought the image of the Third Princess back to him (for he had been ready to fall in love). (Seidensticker 584, “New Herbs”).

柏木が女三の宮の形代として御簾の隙間から逃げた猫を抱き上げ、かわいがるという異様な行動とも捉えられるが、草子地では、「恋しい方に思いなぞえられるとは、好色がましい」と柏木を批評している。英語訳で括弧が付されていることに関しては、括弧で括られた草子地が英語訳では、“it brought …”の節に組み込まれているため、草子地と対応する付加部“for he … love”を括弧で括ることで地の文と草子地に区別をつけていると考える。ちなみに英語訳の解釈は“for he had been ready to fall in love”:「彼(柏木)は恋しがちな人であった。」となっている。“ready”という言葉は叙述において「…しがちな」という意味になるので、この言葉が原文における「すきずきし」と近い解釈を取ることができる。さて、同じ草子地でも「…書かず」という草子地では、筆記編纂者も実体化する部分がある。この草子地は『源氏物語』が「書かれた物語テキスト」であることを自ら認めることになっている。

…いとうらやましくねたきに、あはれとだにおぼしおけよ」など、こまかに聞こえ知らせたまふこと多かれど、かたはらいたければ書かぬなり。(【集成四】、「藤袴」巻、189頁)

He said a great deal more, but of such a questionable nature that I shall not try to describe it. (Seidensticker 485, “Purple Trousers”).

場面は、玉鬘が光源氏の実子ではないと判明し、夕霧と玉鬘の贈答歌後の草子地である。夕霧が玉鬘に発言した内容が他にも細かにあるのだが、筆記編纂者が「かたはらいたければ書かぬなり。」と省略したのである。英語訳では、“He said a great deal more,”「彼

がことさらべらべら言った」の後に“but ... describe it.”までの草子地へとつながる。この“a questionable nature”が「かたはらいたき」を反映している。そして「…書かず」という省略の草子地は“shall not try to describe”：「書こうというつもりはない」となっている。次に「…書かず」の用例を取り上げる。

かかる所の儀式は、よろしきだに、いとこと多くうるさきを、片端ばかり、例のしどけなくまねばむもなかなかやとて、こまかに書かず。（【集成四】、「梅枝」巻、263頁）

I shall omit the details. Even a partial account of a most ordinary ceremony in such a house can be tedious at the hands of an incompetent narrator. (Seidensticker 516, “A Branch of Plum”.)

ここでも“shall”が使われている。辞書で確認すると、“shall: used to show that you are determined, or to give an order, suggestion or instruction” (OALD) となる。この意味から、筆記編纂者は語り手、もしくは、この書かれたものを読むことになる読者に向けて論しているようなニュアンスである。原文の筆記編纂者は「こまかに書かず」と打ち切っているために一方的かもしれないが、前部の「例のしどけなくまねばむもなかなかやとて」が「いつも通りまとまりなくそのまま書き記すのもかえってどうかと思うので」と解釈できることからやはり原文の筆記編纂者も何か論しているようなニュアンスを捉えることができる。英語訳は的確にこの草子地を捉えている。

このように『源氏物語』の様々な草子地を見てきた。原文の草子地から、語り手は複数いる。また、「…書かず」という文言からも語り手が語った内容を書き記していく筆記編纂者の顕在化がされている。つまり、ここからわかることは、原文で現前していた複数の語り手たちは、英語訳では一人の語り手に統合され、物語を語っている。そして、筆記編纂者に関しては、変化なく英語訳でも実体化される。当初は語り手のみが残ると仮定したが、「…書かず」の草子地が忠実に翻訳されていることから筆記編纂者は、消滅せず翻訳でも現れる。

しかし、検討すべき問題はまだある。それは、原文の地の文に現れる一人称的描写である。通常、原文の地の文で登場人物の行動が描写される場合は、現代の私たちでいうと三人称的に描写される。また、語り手の視点から登場人物の行動や言動が描写される場合に『源氏物語』の「語り」の特徴を鑑みて、描写対象によっては、敬語が不可欠のものとなる。この地の文に表出する登場人物の一人称的描写には、敬語が必要な人物であっても、その人物の描写に敬語が使用されない。この問題について、すでに三谷邦明氏の研究で明らかとなっている。本来、『源氏物語』は、語り手が語っている物語を筆記編纂者が書き記した「書かれた物語」という体裁を設定している以上は地の文は語り」の一人称である。それにもかかわらず、「登場人」の一人称的描写に敬語が付されないことを三谷邦明氏は「自由直接言説」と「自由間接言説」（三谷邦明 『源氏物語の言説』、

翰林書房、2002年5月）と定義している。この「自由直接言説」と「自由間接言説」とは何か、そして英語訳になったとき、それらの言説はどうなるのかということを検討したい。まず「自由直接言説」の例を挙げる。

髪はいとふやかにて、長くはあらねど、さがりば、肩のほどきよげにすべていとねちけたところなく、をかしげなる人と見えたり。むべこそ、親の世になくは思ふらめと、をかしく見たまふ。（【集成一】、「空蟬」巻、108頁）

Through not particularly long, the hair was rich and thick, and very beautiful where it fell about the shoulders. He could detect no marked flaws, and saw why her father, the governor of Iyo, so cherished her. It might help, to be sure, if she were just a little quieter. (Seidensticker 50, “The Shell of the Locust”.)

この描写は空蟬を垣間見た光源氏の描写である。つまり、原文は光源氏の行動や心情である。そのため登場人物の行動や心情に、前者ならば「見たまふ」、後者ならば「思ふ」などの敬語が使用されるはずである。しかし、下線部は「見えたり」である。一方で引用の最後に「見たまふ」とある。この違いはいったい何なのか。実は、この「見えたり」こそが「自由直接言説」である。語り手視点の三人称的描写の間に敬語の欠落した登場人物の一人称的描写が入り込んでくる。光源氏なので敬語は必要となる。つまり、敬語がない描写は光源氏主体の視点となる。一方で「見たまふ」は敬語が付されているので語り手による地の文となる。そして「自由直接言説」を少しわかりやすく理解するために英語の直接話法に当てはめてみよう。

Ken heard “I had finished my graduation thesis” from Masato.

このように引用符（“ ”）が付されている文が“Masato”が述べた言葉そのものである。つまり引用符で括られた文のみ、視点が“Ken”ではなく“Masato”である。そのため、「見えたり」が英語でいう直接話法に近いものである。三谷邦明氏は、この「自由直接言説」を語り手、登場人物と読者の三者を図式化し、視覚的に理解できるようにしている。それが「登場人物＝語り手＝読者」（三谷邦明『源氏物語の言説』、翰林書房、2002年5月、57頁）である。語り手が物語をしている体裁なので、登場人物が一人歩きしない。そのため、語り手が登場人物になりきり、登場人物を一人称的に語ったということで、このような図式を取ったのである。さらに「自由直接言説」の特徴は「…と見えたり」、「…思ふ」のように「…と十敬語なしの表現」である。以上が「自由直接言説」である。これが英語訳になると、“the hair was … very beautiful”, “He could detect …”になっている。一人称的に描写されていた部分は三人称となっている。語り手の草子地ではない限り、地の文は三人称に統一されている。次に「自由間接言説」について、それが英語訳になった場合に「自由直接言説」と同じ現象が起きるのかとうことを明らかにする。

いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧ずるに、めづらかなるちご

の御容貌なり。(【集成一】、「桐壺」巻、12頁) 間接言説

The emperor was in a fever of impatience to see the child, still with the mother's family; and when, on the earliest day possible, he was brought to court, he did indeed prove to be a most marvelous babe. (Seidensticker 4, "The Paulownia Court".)

「桐壺」巻で光源氏誕生の場面である。原文の下線部に注目する。「めづらかなるちごの御容貌なり。」と発言したのは、語り手なのか、桐壺帝なのか。この語り手の草子地とも、桐壺帝の発言とも解釈できる部分を「自由間接言説」と言う。ちなみに三谷邦明氏によると、この部分に付加節（と思う）に敬語を加えると「めづらかなるちごの御容貌なり（と思し給ふ）。」と「内語文（登場人物の心中思惟の言葉）」となる。いずれにせよ、「めづらかなるちごの御容貌なり。」という文節に語り手と桐壺帝の視点が混在している。これが「自由間接言説」である。先程と同じように三谷邦明氏の図式に当てはめると、「語り手」→「読者」←「登場人物」（前掲と同じ、66頁）となる。それでは、英語訳では、「he did indeed prove …」となっていることから「自由直接言説」と同様で三人称的描写、つまり語り手視点で統一される。もう一つ「自由間接言説」の用例を確認する。

…何方となく行方なきこちしたまひて、ただ目の前に見やらるは、淡路島なりけり。「あはと遙かに」などのたまひて、…(【集成二】、「明石」巻、274頁)

Overcome with longing, he was like a solitary, nameless wander. "Awaji, distant form", he whispered to himself. (Seidensticker 254, "Akashi".)

「明石」巻で、光源氏が都のある京に思いを馳せる場面である。下線部が「自由間接言説」である。この「淡路島なりけり。」が語り手の草子地なのか登場人物である光源氏の発言なのか、どちらの解釈も取ることができる。一方で英語訳では、「he whispered to himself.」とあるように光源氏の三人称的描写に固定されている。つまり、「自由直接言説」も「自由間接言説」も英語訳に置き換えられたときに語り手視点の三人称となる。続いて、これらの言説が混在する用例を挙げる。

「昼より西の御方のわたらせたまひて、碁打たせたまふ」と言ふ。さて向かひみたらむを見ばや、と思ひて、やをら歩み出でて、簾のはさまに入りたまひぬ。

この入りつる格子はまだささねば、隙見ゆるに、寄りて西さまに見通したまへば、この際に立てたる屏風も、端のかたおし畳まれたるに、まぎるべき几帳なども、暑ければにや、うち掛けて、いとよく見入れらる。(【集成一】、「空蟬」巻、107頁)

"The lady from the west wing has been here since noon. They have been at Go."

Hoping to see them at the Go board, Genji slipped from his hiding place and made his way through the door and the blinds. The shutter through which the boy had gone was still raised. Genji could see through to the west. One panel of a screen just inside had been folded back, and the curtains, which should have

shielded off the space beyond, had been thrown over their frames, perhaps because of the heat. The view was unobstructed. (Seidensticker 50, “The Shell of the Locust”).)

「空蟬」巻の引用である。原文の最初の下線部「…見ばや、と思ひて」と思っているのは光源氏である。光源氏の心情に敬語が付されていない。また「…と十敬語なしの表現」から、これは「自由直接言説」である。一方で「暑ければにや」の表現は語り手の草子地とも光源氏の心情とも取れるため「自由間接言説」である。英語訳は、最初の下線部に“Hoping to see them at the Go board, Genji slipped from his hiding place ...”とある。これは、分詞構文のため“Hoping”の主語は“Genji”である。“As Genji hoped to see them at the Go board, Genji slipped from his hiding place ...”のため三人称であるとわかる。また、後の“perhaps because of the heat.”も語り手視点に固定されている。次に「若紫」巻の引用である。

中に十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなれたる着て、走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじくおひさき見えて、うつくしげなる容貌なり。（【集成一】、「若紫」巻、189頁）直接、間接言説

Much the prettiest was a girl of perhaps ten in a soft white singlet and a russet robe. She would one day be a real beauty. (Seidensticker 87, “Lavender”).)

「空蟬」巻と同様に垣間見の場面である。原文の最初の下線部「中に十ばかりにやあらむと見えて」とあることから「自由直接言説」である。光源氏が若紫を垣間見て「十ばかりにやあらむ」と見たのである。英語訳は“Much the prettiest was a girl of perhaps ten”とあるように三人称の描写に変換されている。原文の後半の下線部「いみじくおひさき見えて、うつくしげなる容貌なり」では、若紫のことを批評しているのが語り手と光源氏の両方で解釈できるため「自由間接言説」である。英語訳は、“She would one day be a real beauty”となる。主語（動詞の外項）が“She”＝「若紫」なので三人称となっている。そして「空蟬」巻と「若紫」巻の引用は双方とも垣間見の場面である。推測にすぎないが垣間見の場面の場合、語り手の視点と垣間見をしている登場人物の視点が混在し、言説の入交じりが起こりやすい可能性がある。いずれにせよ、原文では「自由直接言説」や「自由間接言説」のように地の文の人称が一定していない。同じ文節でも自由に人称が変わっている。しかし、英語訳となると一律に三人称に統一されるということがわかる。

このように人物の呼称や敬語も含めて、『源氏物語』の特徴である語り手による「語り」の物語、「書かれた物語」が英語訳になった際に存在を隠蔽した物語の作者によって設定されていた複数の語り手は一人の語り手に統一される。そして、人物の呼称が固定され、ときには名指しされる。さらに地の文の敬語が完全に脱落する。前者は原則として英語は主語を取ることに関連し、後者は英語に敬語がないことに関連する。このように

言語の違いによって必然的に起きた現象が『源氏物語』の「語り」の体裁にどのような変化をもたらしたのか。それは、語り手の立場である。語り手は英語訳でも実体化される。しかし、その語り手は『源氏物語』の時代とは遥か遠くに位置しているか、あるいは英語訳の語り手も物語を誰かから伝え聞いた内容である。つまり実際にあるいは同時代の世界を見聞していない。そのため、『源氏物語』で登場する人物とは、会ったことがなく、単純に話の中に出てきた登場人物にすぎないため、名前を伏せる必要もなく名指しができる。また、実際に会ったことのない話の中の人物にすぎないため敬語を付す必要がない。例えば、実際に師事した先生の物語をする。そのとき、先生とは実際に会ったこともあり、同時代を生き、先生の行動や言動を見聞しているため、先生の物語をする際には「あの方（先生）は、たいそう喜んでいらっしゃった」のように敬語を付して違和感がない。一方で遥か昔の偉人、例えば藤原道長について物語をする。「この絵は、あの方（藤原道長）が釣殿へ行かれて、池の龍頭鰯首の船を御覧になったときの絵ですよ。」と現代の私たちが発言した場合に違和感がある。「この絵は、藤原道長が釣殿から池の龍頭鰯首の船を眺めている絵です。」と語るのが自然である。なぜなら、実際にその時代を生き、藤原道長の行動や言動を直接見聞していないからである。つまり、英語訳の語り手も同様で『源氏物語』の時代を生きておらず、そのため直接見聞したことでなく、最初に述べたように誰かから語り聞いたか、語り手自身とは時間的に遥か昔の話を語っているのである。

このように言語的差異がもたらす変化は著しい。しかし、『源氏物語』を享受すること自体は原文も英語訳も遜色がない。物語の内容に変化がないからである。それは、翻訳者であるサイデンステッカー氏の力量とも言える。『源氏物語』に限らず、言語的差異を超えて翻訳が存在することは翻訳者の力であることを忘れてはならない。詳しくは拙稿『『源氏物語』英訳研究—〈言語・構造・表現の視座から〉Edward G. Seidensticker 訳を中心に—』を参照していただきたい。

参考論文及び文献一覧

- ・伊井春樹 『世界文学としての源氏物語【サイデンステッカー氏に訊く】』、笠間書院、2005年10月
- ・伊井春樹 監修、ハルオ＝シラネ 編集、『講座 源氏物語研究 第十一巻 海外における源氏物語』おうふう、2012年4月
- ・石田譲二・鈴木好子 校注 『新潮日本古典文学集成 源氏物語 一～八』、新潮社版
- ・神田龍身 『偽装の言説—平安朝のエクリチュール』、森話社、1999年7月
- ・陣野英則 『源氏物語の話声と表現世界』、勉誠出版、2004年11月
- ・中島平三 『ファンダメンタル英語学演習』、ひつじ書房、2011年2月
- ・三田村雅子 『源氏物語 感覚の論理』、有精堂出版、1996年3月

- ・三谷邦明 『物語文学の言説』、有精堂出版、1992年10月
- ・三谷邦明 「附載論文 源氏物語と二声性—作家・作者・語り手・登場人物あるいは言説区分と浮舟巻の紋中紋お技法—」、『源氏物語の方法 〈もののまぎれ〉の極北』、翰林書房、2007年4月
- ・三谷邦明 『源氏物語の言説』、翰林書房、2002年5月
- ・元島淳志 「『源氏物語』英訳研究—〈言語・構造・表現の視座から〉 Edward G. Seidensticker 訳を中心に—、2014年
- ・Murasaki Shikibu., Translated with an introduction by Seidensticker, Edward G. The Tale of Genji. Japan: Tuttle Publishing, 1976.
- ・Oxford Advanced Learner's Dictionary 8th edition. Oxford University Press, 2010